

怪人二十面相論

宮本和歌子

一、はじめに

怪人二十面相は、昭和十一年一月から同年十二月にかけて講談社の少年月刊誌『少年倶楽部』に連載された江戸川乱歩作「怪人二十面相」で初登場した盗賊である。怪人二十面相について、同作では次のように説明されている。

「二十面相」といふのは、毎日々々新聞記事を賑はしてゐる、不思議な盗賊の渾名です。その賊は二十の全く違つた顔を持つてゐるといはれてゐました。つまり変装が飛切上手なのです。どんなに明るい場所でも、どんなに近寄つて眺めても、少しも変装とは分らない、まるで違つた人に見えるのださうです。老人にも若者にも、富豪にも乞食にも、学者にも無頼漢にも、いや、女にさへも、全くその人になり切つてしまふことが出来るといひます。では、その賊の本当の年は幾つで、どんな顔をしてゐるのかといふと、それは誰一人見たことがありません。二十種もの顔を持つてゐるけれど、その内のどれが本当の顔なのか、誰も知らない。イヤ賊自身でも、本当の顔を忘れてしまつてゐるのかも知れません（「怪人二十面相」連載第一回、昭和一一

年一月『少年倶楽部』

正反対の属性の人物にでも化けることができ、その変装は容易に見破ることができないほど巧妙で本当の顔を知る者はいないとされている。怪人二十面相と名探偵明智小五郎および明智の少年助手小林芳雄率いる少年探偵団の対決は人気を博し、怪人二十面相と少年探偵団の対決は頻繁に描かれることとなった。

「透明怪人」(『少年』昭和二六年一月〜二月、全一三回)は少年探偵団シリーズ第七作目にあたり、作中では怪人二十面相が窃盗犯としての嫌疑を免れること、世間を驚かせ恐怖させることを目的に透明な肉体を持つという透明怪人の噂を流し、少年探偵団の面々を苦しめる。本文中には「ぼくはふと、『透明人間』という小説のことを思いだした。イギリスのウエルズという人が書いた有名な小説だよ」(『透明怪人』第二回)と、ウエルズ作の中篇「透明人間」(一八九七年)への言及が見られる。乱歩は「透明の恐怖」(昭和三一年一〇月『別冊文芸春秋』)においてもH. G. ウェルズの「透明人間」を、透明人間をテーマとした小説の中で「代表的なもの云つていい」と述べべており、透明怪人の着想がウエルズ作の「透明人間」に拠

っているであろうことが容易に推測できる。

少年探偵・江戸川乱歩七『透明怪人』（平成一〇年一月ポプラ社）の平井隆太郎によるあとがき「理屈に合った『不思議な話』では、

『透明怪人』でもふれていますが、イギリスのウエルズという人の作品に『透明人間』というのがあります。似たような題名ですがこれは菓を飲んで透明になるというので、科学的なのですが実際はまったくの空想小説で、どんなに科学が進歩しても実現できそうもないことです。父は科学に名前を借りた空想小説はきらいでした。（中略）だから『透明怪人』でもいろいろ苦心して常識的に実現できる道具だてで話を組み立てています。（中略）世の中に科学をこえた不思議はないという教訓にもなっていますね。

と、本作では実現可能な透明人間の描写にこだわったとし、「父が『透明怪人』で言いたかったのは、世の中には理屈を越えた不思議はないことだったのです」としている。

黄金罫體の会著『少年探偵団読本』（平成六年一二月情報センター出版局）では、濱中利信が本作を「前半で提示された不可思議な謎が、科学的、理論的に一つずつ解明されるというスタイルは、本格推理小説の本道であり、少年ものとはいえ、あくまでフェアプレイに徹する乱歩の態度は流石である」と評している。発想の出発点がウエルズの「透明人間」であったにしても、実現可能な手法で透明人間の謎を解き推理小説としての体裁を保ち、不可解な現象に対して現実的な解釈を論理的に示したのが「透明怪人」であるというのがほぼ一致した見解である。

「透明怪人」での二十面相は、盗みを行おうとしているのは透明怪人であるから透明人間ではない人間は嫌疑対象ではないという、乱歩の言葉でいう人間の心理的盲点を利用して追及を逃れていた。本作には、ウエルズ作品のような透明な肉体を持つ透明人間は登場しない。現場で自ら犯行に及んでいた二十面相は、視認されないため存在が気付かれない透明人間のように疑わしい行動が気付かれず犯人であるとは気付かれていなかった。間違はなく現場に存在しているにもかかわらずその場に居合わせた人々が気付かないという点において、本作での二十面相は透明な肉体を持った透明人間と同質であったといえる。犯人であることを悟られず犯罪を遂行するために意図的に知覚されざる存在へ変身していた本作の二十面相は、「二人の探偵小説家」（大正一五年一月〜二月『写真報知』）に登場する、他者の人格に吸収され操られる空気男としての性質を有しているとも考えられるのではないかと。さらには、『ぺてん師と空気男』における空気男にも共通する、他者の人格に吸収され操られる一人二役要素を見出すことができるだろう。

二、透明になる二十面相

乱歩の随筆「透明の恐怖」（昭和三十一年一〇月『別冊文芸春秋』）以下、引用同じ）では、イギリスの作家チェスタートンが一九一一年に発表した短編「見えない人」における、郵便配達人が殺人事件の犯人であったというトリックを挙げ、透明人間の解説をしている。「見張りたちは、郵便を配達するために出入りするこの男を、全く犯罪から除外して考えていた。見て

いても、それと気づかなかつた。つまり心理的盲点にはいつていた^③のである」と、郵便配達人はアパート内への侵入者として考えないという人間の心理的盲点を利用し殺人の嫌疑対象から外れることに成功したと解説している。「盲点による透明作用」を利用したトリックであり、心理的盲点に入ることを「盲点にはいつていた、つまり透明になつていた」と換言した上で、チェスタートンはポールの「盗まれた手紙」（一八四四年）からこのトリックを学び、クイーンはチェスタートンの「見えない人」を模して一九三二年「Xの悲劇」で、「犯人は乗客の中にいる。車掌は乗客ではない。だから車掌は犯人ではない」という「三段論法的盲点」のトリックを用いたと説明している。

心理的盲点を利用し真犯人の発覚を防ぐことを透明になると呼ぶのであれば、「透明怪人」の二十面相も、作中で見事に透明人間に変身していたとすることができるのではないか。作品冒頭で、ろう人形の怪物を尾行していた木下君と島田君という二人の少年の前に二十面相が新聞記者・黒川勝一として現れ、透明怪人を追う正義感の強い大人として少年の信頼を得ると同時に透明怪人の知識を植え付けている。ろう人形の怪物に化した二十面相の仲間が島田君と木下君を廃屋までおびきだし、透明人間が服を脱いでいるかのような演出を少年の前で行い、少年に恐怖感を与える。黒川という新聞記者に化した二十面相がそこへ現れ、透明怪人をやつつけるかのように一人で格闘して見せ、怪人を尾行してきた少年たちの勇気を褒め称えることにより、頼もしい大人に憧れ、認められたいと願う小学生の心を掌握している。その上、大きな新聞社で記者を務めている身元のしつかりした人物が盗みを行うはずはない、透明怪人

から少年を助けようとしてくれた人物であるから信頼に値しないはずがないという心理的盲点を利用し、島田君の父親である島田氏から真珠塔の警護を依頼されることにも成功している。巧みな人心操縦術を披露している二十面相であるが、二十面相は黒川という人物に成りすまし、透明怪人を世間に信じ込ませる準備として東洋新聞記者となつた。そして、透明怪人が現れたという虚偽の目撃談をまことしやかな新聞記事にしたのである。

透明怪人が島田家の真珠塔^④を狙っているとして島田氏は嚴重な警備態勢を敷くが、警備に携わつた一同は真珠塔を狙っているのは透明怪人であることを疑わず、犯人は透明怪人である。黒川は透明怪人ではない。だから黒川は犯人ではないという三段論法を無自覚のうちに展開していた。真珠塔の所有者である島田氏も同様の論法から黒川を信頼して真珠塔の保管場所に案内して金庫内部の真珠塔を見せ、真犯人の黒川に真珠塔を盗み出す絶好の機会を与えた。ところが名探偵明智小五郎が看破した透明怪人事件の真相とは、透明怪人は怪人二十面相がでつち上げた狂言に過ぎず、透明怪人の犯行とされていた事件はどれも二十面相とその手下の犯行であるというものであつた。明智は、透明怪人の謎がなかなか解けないのは「表のほう」、つまり「客席にすわつて、しばいを見ていた」からであり、真相を見抜くことのできる探偵は「いつもがくやのほうから、裏がわを見ている」ため、最初から犯人の予想がついていたと述べている（「透明怪人」第一三回、昭和二十六年二月『少年』）。

「表のほう」とは心理的盲点に捉われたまま物事を見ている状態を指し、心理的盲点からの脱却による正しい認識を目指す

状態を「かくやのほうから、裏がわを見ている」とした明智の言葉は、透明人間は心理的盲点の作用によって生み出されたことを比喩的に説明するものである。「透明怪人」で透明怪人の目撃談を語る黒川は、「あいては目に見えない怪物」「ほけもの」「えたいのしれない怪物」（『透明怪人』第一回）、「空気がみたく目に見えないやつ」（『透明怪人』第二回）と、人間ではない存在であること、目に見えない肉体を持っていることを強調している。常識ではにわか信じがたい透明怪人を世人が素直に信じたのは、「黒川のほかに、だれも見えていないことでも、新聞記事になれば、うそだとは思」わないからだと明智は説明している。新聞に嘘が書かれているはずがない、透明怪人のことが新聞記事になった、だから透明怪人が嘘であるはずがないという三段論法的盲点により、世間の人々は黒川の書いた透明怪人の捏造記事を信じたのである。

「透明怪人事件を心理的盲点に捉われることなく「裏がわから見」ていた明智には、透明怪人は二十面相の捏造であることを把握できていた^(四)。対して、二十面相の化けた黒川の書いた新聞記事信じていた人々は、透明怪人信じるあまり黒川の疑わしさを看過し嫌疑の対象から除外していた。世人にとつて真犯人の黒川とは透明で気付かない存在だったのである。心理的盲点に入り込んだ状態とは、認識されないという点で視認できない透明な肉体を持っている状態にも等しい。「透明怪人」に登場する透明人間とは二十面相の狂言芝居に使われた透明怪人ではなく、世人の心理的盲点に入り込み、犯人としての存在が認識されずにいた二十面相を指しているといえる。

三、匿名の優位性

昭和十一年発表「怪人二十面相」（『少年倶楽部』）で初登場した怪人二十面相の正体について、「サーカスの怪人」（昭和三年一月〜二月『少年クラブ』）では遠藤平吉という名のサーカス団出身の男だと説明されている。しかし、判明した本名や来歴が改めて他の作品で言及されることもなかったことから、「怪人二十面相」に始まる一連の作品群で描かれた怪人二十面相の正体がいずれも遠藤平吉という人物であったとは考え難い^(五)。怪人二十面相というあだ名は二十の顔に化けられるとして二十面相が自称したことによるが、自己の人格や自我を徹底的に隠匿してあらゆる人物に化ける二十面相は舞台上で役柄になり切る役者にも似た活動形態であり、他者になりすます際に使用している怪人二十面相というあだ名は、いわば芸名である。一連の透明怪人事件犯の説明をする明智小五郎が、事件を芝居を上演している舞台に喩えていることも、二十面相の役者の性質を示しているといえる。

他人に化けている姿を常態としていた二十面相にとつて重要なのは演じる役柄の名と怪人二十面相という芸名であつて、本当の顔を忘れるほどまでに素顔に戻ることがない彼は、本名を使用する機会もほとんどなかったものであろう。芸名で活動する二十面相が本名を世間に告知することは、演技者としての側面ではなく極めて私的な側面に人々の注意を引き付ける可能性があり、捕縛される危険も伴う。一般的に、本名を知られることは何を意味するのか。ここで、万葉集巻一雑歌一、大泊瀬稚武天皇の歌を掲げる。

籠もよ み籠もち 掘申もよ み掘申もち この岡に 菜
摘ます子 家告らせ 名告らさね (そらみつ) 大和の
国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ
座せ 吾にこそは 告らめ 家をも名をも (昭和三四年九
月筑摩書房、日本古典文学全集2、村木清一郎訳『万葉集』
上)

この歌から、名を知られることは自己の一切を委ねることに等しいという当時の考えがうかがえる。南方熊楠は、「本名を知た者に知られた者が随意支配するゝてふ迷信」の存在に言及し、「扱人が己の名を呼ぶ時、応と答ふるの、先方が確かに己が本名を知たと承認する訳だ、随て鬼霊に名を呼べて答ふると即時魅されたり、命を取れたりすると信ずるに至つたのだ」と考察している(南方熊楠「南方随筆」、大正二年九月『郷土研究』第一巻第七号)。

『郷土研究』第一巻第三号(大正二年五月)では、文治元・一一八五年―二月二七日、元和四・一六一八年―一月六日という二つの日付とともに記録に残っている「名を呼びて其人の心神を奪」う呼名の怪が報告されている(桜井秀「俗信雑記」)。柳田国男はこの桜井秀の報告記事を受け、「郷土研究」第三巻第一〇号(大正五年一月)掲載の「呼名の怪」において「名を呼んで人の心神を奪ひ去る妖怪」のさらなる例を紹介している。

人間以外の存在が名を呼び、場合によつては命を奪うという、「呼名の怪」に似た伝承は古くから多数存在する。以下、いくつかを挙げる。

九月ノ下ツ暗ノ比、灯ト云フ事ヲシテ、大キナル林ノ当リ

ヲ過ケルニ、林ノ中ニ辛ビタル音ノ気色異ナルヲ以テ、此ノ灯為ル者ノ姓名ヲ呼ケレバ、「怪」ト思テ馬ヲ押返シテ、其ノ呼ブ音ヲ弓手様ニ成シテ火ヲ煽串ニ懸テ行レバ、其ノ時ニハ不呼ザリケリ。本ノ如ク女手ニ成シテ、火ヲ手ニ取テ行ク時ニハ必ラス呼ケリ。(中略) 弟、「糸希有ナル事ニコソ侍ナレ。己レ罷テ試ム」ト云テ、灯シニ行ニケル、彼ノ林ノ当リヲ過ケルニ、其ノ弟ノ名ヲバ不呼ズシテ、本ノ兄ガ名ヲ呼ケレバ、弟其ノ夜ハ其ノ音ヲ聞ツル許ニテ返ニケリ。兄、「何カニゾ、聞給ツヤ」ト問ケレバ、弟、「実ニ候ヒケリ。但シ、エセ者ニコソ候メレ。其ノ故ハ、実ノ鬼神ナラバ、己ガ名ニコソ可呼キニ、其御名ヲコソ尚呼ビ候ヒツレ。」(中略) 弟、「音ニ付テ射候ツレバ、尻答フル心地シツ。明テコソハ、当リ不当ズハ行テ見ム。」ト云ヒテ、夜明ケルマ、ニ兄弟搔烈テ行テ見ケレバ、林ノ中ニ大キナル野猪、木ニ被射付テゾ死テ有ケル。

(「被呼姓名射頭野猪」語第三十四)、「今昔物語集」巻第二十七、昭和五年三月小学館、日本古典文学全集二四、馬淵和夫、国東文麿、今野達校注・訳『今昔物語集』四)
「エセ者ニコソ候メレ。其ノ故ハ、実ノ鬼神ナラバ、己ガ名ニコソ可呼キ」と、本物の鬼神ならば自分の本当の名を知っているはずであるが知らなかったのが、低級な化生の物であろうと述べられている。実際、その正体は野生動物であった。「西鶴諸国ばなし」には、美女として現れ名を呼び、精気を奪うという「紫女」の話が収録されている。

物の淋しき突揚窓より、やさしき声をして、「伊織さま」と名をよぶ。女の来る所にあらねば、不思議ながら、有様

をみれば、いまだ脇明けしきぬの色、紫を揃へて、さばき髪を真中にて、金紙に引き結び、この美しき事、何ともたとへがたし。これを見るに、年月の心ざしを忘れ、只夢のやうになつて、うつつをぬかしけるに、(中略)契りを籠めて、いまだ二十日もたたぬに、我は覺えず、次第に瘦するを、念比なる薬師のとがめて、脈を見るに、おもふにたがはず、陰虚火動の気色に極まり、(中略)「これぞ世に伝へし、紫女といふ者なるべし。これにおもひつかるこそ、因果なれ。人の血を吸ひ、一命を取りし事ためしあり。」(中略)「いかにもく、しるべもなき、美女の通ふはおそろし。」(紫女)、貞享二・一八六五年「西鶴諸国ばなし」巻三、昭和四八年一月小学館、日本古典文学全集三九、宗政五十緒校注・訳『井原西鶴集』(二)

生真面目な生活を営んでいた浪人者の住居へ美女が突然現れ、名を呼んだ。不審に思ったものの、女の美しさにそれまでの意志が揺らぎ、逢瀬を重ねるようになった。日増しに痩せる浪人者を見かねた薬師が聞きだしたところ、人の命をも奪う紫女という化物と判明したという話である。薬師に説得された浪人は、心当たりのない美女が通つてくるのは恐ろしいことだと述べている。紫女は化物であったからこそ、「伊織」という浪人の名を知っており、名を呼ぶことができたのである。寛延二・一七四九年神谷養勇軒「新著聞集」には、老婆の姿でやってきた化物の話が収録されている。

江戸八町堀二丁目ねぢがね屋甚兵衛といふ者ある時客と語り居ける処に。六十計の姥置手拭して。中戸の口にとゞずみ。いかに甚兵衛むかひに來りたり。これへ出よと招くを。

下人共見てこは何者ぞ狂人にこそとて引立追放つ処に。甚兵衛にはかに心地あしとて。絶死しけるを葉針などかはるく用ひけるに。更に験なくして。其暮方に身まかりし。其姥は何地いかなる者といふ事をしらず。(婆に妖呼に來り忽ち死す、寛延二・一七四九年神谷養勇軒「新著聞集」、明治三六年三月博文館、田山花袋、柳田国男校訂「近世奇談全集」)

迎えに來たと称し見知らぬ老婆が主人の名を呼び訪ねてきたところ、名を呼ばれた主人が死亡したという、桜井秀や柳田国男が報告した「呼名の怪」と同一タイプの話である。見知らぬ者が自分の名を呼んだ場合、その正体は人間以外のものである、という考え方が古くから広く存在し、うかつに名を知られるべきではないとされてきたことがわかる。柳田国男は、「日本でも支那でも、名といふものは、無闇に他人から呼ぶべきものではない」(「名字の話」(上)、明治四四年七月『斯民家庭』第二編第七号)と説明しているが、南方熊楠も先掲大正二年九月『郷土研究』掲載の「南方随筆」において、本当の名を知られ、呼ばれたことにより特殊な力を失う伝承を以下のように複数紹介している。

西暦千廿年瑞典ルンドの大寺を建てた時、昼間苦辛して積上げた石材を毎夜巨鬼來り悉く運び去た、寺の願主之を責ると、鬼の名を定期中に指中たら二度と來ない、指中ねば何時迄も邪魔して遣ふと云ので、願主弱り入り思案も尽て海浜を歩くと、其鬼の妻が夫を「フキン」と呼だ、聞て大悦ルンドに還り、夜半に三度高く「フキン」と呼ぶと、鬼大に驚き即時去たと云ふ

オラフ（十一世紀の那威王）鬼をして大寺を作らしむ、約すらく、寺成る迄に王が鬼の名を知らば鬼王に囚られ、鬼の名を知得ずば日月又は王の身を鬼に与ふべしと。扱寺院完成に近く、塔上の知風板^{かぜみ}だけ具らず、其時王大に憂ひて野を徜徉^{ぶら}く、偶と鬼の妻其児の啼を止ん連、明日汝の父日月か王の軀を持還る筈故温良しく待てと言ふ、話の中に鬼の名が知れる、王帰りに鬼が知風板を据付けんと塔頂へ登つた所に向ひ鬼の名を呼ぶと、仰天して転り落るを取て押へ永く囚へ置たと有る、

『続南方随筆』（大正一五年一月岡書院）刊行に際しては、右記事について大正一五年九月に次のような増補も行つてゐる。

グリムスの独逸童話に貧女王に薬を黄金につむぎ替よと命ぜられ泣く、処え小魅来つて汝王后と成て初めに産るゝ児をくれるなら、汝に代つて此業を成就すべしといふ、他に良案もないから承諾すると、小魅造作もなく夥しい薬を黄金に紡ぎ化した、王此女に神巧ありと感じ之を后とし、久しからぬ内に美しい児ができた、其時かの小魅忽ち来つて其児を乞ひ、后が極めて悲しむをみて、三日内に吾名をいひあてたら此児を貰はずに済しやろうと言ふ、第一第二の夜后其小魅に自分の知た限りの人名を列ね聞せど何れも吾名でないといひ続けた、三日目に後の使者が此小魅が自分の名を呼で踊る所へ行かゝり帰つて后に告たので、后其名を小魅に聞すと大に怒つて自滅したとある。その類話は一八八九年板ジョーンス及クロップのマジャー民譚集の

「なまけた糸くり女が后となつた話」とその註に載せある。

（大正一五年一月岡書院『続南方随筆』）

日本の昔話、「大工と鬼六」も、これらの類話一つであろう。『日本昔話通観』研究篇二「日本昔話と古典」（平成一〇年三月同朋社）収録の、「大工と鬼六」の内容説明文を掲げる。

①大工が、架けた橋がすぐ流されて困つていると、川底から現れた鬼が、おれの名を言い当てたら架けさせてやる、ともちかける。②大工は逃げる途中で、鬼の子のうたう父の鬼六の歌を聞き、お前の名は鬼六、と言うと、鬼は溶けて泡となる。

同書では、先に挙げた万葉集収録の大泊瀬稚武天皇の歌や、南方熊楠の挙げたグリム童話の「ルム・ベルシユティルツヒェン」、イギリス民話「トム・ティット・トット」、フィンという名のトルルのデンマーク民間伝承が、「大工と鬼六」の類話として紹介されている。

先掲「南方随筆」には、「名を云るゝと鬼神が害を為し得ぬ、盗者が財を伺ふ時、財主に自分の名を言るゝと盗を行ひ得ぬと同じだ」ともあり、魔力を持った化生でも名を知られた途端に魔力を失うという迷信が古今東西に広く存在していたことが説かれてゐる。無暗に本名を呼ばれることを忌み、相手が自分の名を知らないが自分は相手の名を知つてゐる場合名を知られていない者の方が優位に立つ、匿名の優位性とも呼ぶべき迷信が国を問わず存在しているのである。次章では、本名不詳の二十面相と匿名の優位性について論を進める。

四、誰でもない者としての二十面相

少年愛への関心も手伝つて、乱歩の旧蔵書には古代ギリシヤ文化史やギリシヤ神話、ギリシヤ文学関連の書籍が多数存在している。古代ギリシヤ叙事詩「オデュッセイア」は「イーリアス」と並び、「一般西欧詩文の源泉であり、典型である」（土井晩翠跋文、昭和一七年二月富山房、ホーマー著・土井晩翠訳『オデュッセイア』とされているが、江戸川乱歩の筆名の由来であるエドガー・アラン・ポーの詩「大鴉」（一八四五年）にも、「オデュッセイア」に名が見られる忘れ葉ネペンテスが登場している。早稲田大学生時代に図書館に籠り探偵小説の洋書を英語で濫読していた乱歩もギリシヤ古典文学を踏まえた表現に接する機会は少なからずあり、相応の知識を持ち合わせていたと考えるのが妥当であろう。本章では匿名の優位性が顕著に顕れている例として、ホメロス作と伝えられる「オデュッセイア」第九歌を参照する。隻眼の巨人であるキュクロプス族が住む島に流れ着いたオデュッセウスが誰でもないという意の偽名を用い、部下を食い殺したポリュペーモスという名のキュクロプスを退治する内容である。ポリュペーモスは洞窟に迷い込んだオデュッセウスに対し「異郷の汝何ものぞ？」（昭和一七年二月富山房、ホーマー著・土井晩翠訳『オデュッセイア』以下、引用同じ。）と尋ねるが、オデュッセウスは用心深く自分の名を明かさない。ポリュペーモスがオデュッセウス一行のうちの六人を食い殺した後、オデュッセウスはポリュペーモスに強い酒を飲ませる。「キュクロプスの心今臆腫として、酒のため乱るる」状態になったところを見計らい、オデュッセウスは「キュクロプスよ、汝問ふ誉れのわが名いざ告げむ」

と宣言し、「『誰も無し。』とぞ我れ名のる、われの父母また一切の、友悉く残りなく『誰も無し。』とぞわが名曰ふ」と偽名を名乗り、酔つて寝込んだポリュペーモスの目を潰している。オデュッセウスに目を潰されたポリュペーモスは集まった仲間に対し「誰も無し」にやられたと告げるが、仲間のキュクロプスたちは誰にやられたのでもないと言っていると判断して帰つてしまふ。オデュッセウスは策略をめぐらしポリュペーモスの洞窟から抜け出すが、キュクロプスの島から逃亡する際に油断して本名を明かし、ポリュペーモスは「オデュシユウス——イタケーに住めるラーエルテースの子——故郷に返すこと勿れ（中略）遅く歸りて家に難受けよ」と呪いの言葉を吐いた。オデュッセウスがキュクロプスの島から脱出できたのは、本名を隠すことでポリュペーモスの目を潰した犯人として名指しされることを防ぎ、仲間のキュクロプスたちの報復を回避したからである。ポリュペーモスの名を知っていたオデュッセウスと、ポリュペーモスに本名を隠していたオデュッセウスの間には、「本名を知た者に知られた者が随意支配さるゝ」関係が成立していた。しかし、船で逃げてゆくオデュッセウスが油断して本名と素性を明かして以降、彼はポリュペーモスに対して目を潰す以上の危害を加えることができていない。安全な場所まで逃げたオデュッセウスは「嘲弄をキュクロプスに放ち曰」つてポリュペーモスを挑発し精神的打撃を与えようとするが、怒り狂ったポリュペーモスは父である海神ポセイドンに復讐を依頼し、オデュッセウスは苦難の船旅を続けなければならなくなっている。「名を云るゝと鬼神が害を為し得ぬ」という南方の説明通り、自発的に匿名の優位性を破壊して以降のオデュッ

セウスは、ポリュペーモスの呪いを一方的に受ける立場となつた。

ここで再び怪人二十面相に言及すると、二十面相の本名が明らかにされていなかった理由の一つは、匿名の優位性を発効させ続けるためではなかったらどうか。柳田国男は前掲「名字の話」で、日本風の歴史、記録類でしばしば名を諱んでいることからの人物についての記述であるのか不明瞭となる場合が少なくないと述べ、「右の太郎、次郎、三郎は、今日の太郎、次郎、三郎の如く人の名ではないのであります。単に同じ人の長、次男といふことを意味する計りで、普通の名詞であります。全体普通名詞と固有名詞との区別は、よく考がへて見れば殆ど境界がないのでありまして、同じ名を呼ぶ物が幾つもあれば、勿論普通名詞でありますが、其物が偶然にも一つしかなければ、どちらとも見られるのであります」と、固有名詞のように見えるが普通名詞と考えるのが適切な名が存在すると説いている。柳田がここで例に挙げている太郎、次郎、三郎といった人名のように、乱歩の少年探偵団シリーズに登場する怪人に与えられた二十面相というあだ名は、固有名詞のような体裁を持った普通名詞ではないか。二十面相というあだ名は特定の人物を指す固有名詞として用いられているのではなく、「同じ名を呼ぶ物が幾つもあるはずがないと思われるほどの、並外れた変装能力を悪用する怪人物全般を指す普通名詞として用いられているということである。並外れた変装能力を悪用する怪人物が複数いた場合、普通名詞である二十面相というあだ名は個人を識別する機能を伴わないまま各人に適用される。個人の識別が困難であるということは本名の判別、特定が困難だということ

でもあり、各人の本名がわからないなら「財主に自分の名を言われる心配も少ない。二十面相というあだ名は「誰も無し」というオデュッセウスの偽名同様、そのあだ名で呼ばれている者の正体を秘匿し匿名性を保持する機能を持っている。本名が知られる心配が少ない、つまり本名を呼ばれて犯行を阻止される心配が少ないため、二十面相は嚴重な警備をかくぐつて盗みを繰り返すことができたのであろう。

それでは、オデュッセウスの偽名が二十面相というあだ名に対応すると考えるならば、ポリュペーモスは二十面相と敵対している明智小五郎に対応すると考えてよいのだろうか。ポリュペーモス Πολυπηγος とは、数が多い、大ききや程度が大ききいという意味の πολύς と、風評、名声という意味の φήμη が複合した名である。明智小五郎は「日本一の私立名探偵」（『少年探偵団』、昭和二年一月～二月『少年倶楽部』）として有名な人物であり、本名を知る者が誰もおらず正体不明の二十面相と、誰もがその名を知っており頻繁に噂される明智小五郎は、「誰も無し」という偽名のオデュッセウスとポリュペーモスの関係に一致している。

だが、ポリュペーモスがオデュッセウスの策謀に負けて唯一の目を潰されたのとは異なり、明智小五郎は策謀において二十面相に劣っていないものとして描かれ、決定的な敗北を味わうこともない。本名を隠して悪事をはたらく二十面相を捕縛に導く名探偵明智小五郎は、「本名を知た者に知られた者が随意支配するゝてふ迷信」に反しているのではないかという疑問が生じるかもしれない。明智と二十面相の対決を描いた作品では、超人的能力を持った明智小五郎が卓抜な推理と鋭い観察眼によ

って二十面相の巧妙な変装とトリックを見破り、明智の能力が称えられるのが定型である。この定型は明智小五郎の優れた能力を強調する効果を持つが、名探偵明智小五郎をも手こずらせる怪人二十面相の能力を強調するものでもある。明智小五郎と怪人二十面相は相手の能力によって己の能力を最大に發揮する機会を得、超人的能力を世間に披露しているが、相互の性質を補完し合い相手の能力を最もよく引き出す二者関係とは、『ペてん師と空気男』における空気男・野間五郎とペてん師・伊東鍊太郎の表裏一体の一人二役関係の特徴でもある。一方が本名不詳、もう一方が「日本一の名探偵」として明智小五郎の名が有名であるという対照性も、対極にいる相手を補完し合い互いの能力を最大限まで引き出し合う両者の性質を端的に示すものであり、空気男・野間とペてん師・伊東同様に明智小五郎と怪人二十面相もまた、一方が欠けてはもう一方の能力を充分に發揮できない表裏一体の一人二役関係にある。私立探偵として重要な明智の世評は二十面相のトリックを見破ることに高まっていることから、明智の評判を左右しているのは明智と表裏一体の立場にいる二十面相に他ならないといえる。明智は「本名を知た者に知られた者が随意支配さるゝてふ迷信」に捉われ、探偵としての命運を本名を隠した二十面相に随意支配され続けている。

乱歩は「炉辺閑話 変身願望」(昭和二八年二月『探偵倶楽部』)において、化けたい望みは普遍的であるとし、「俳優というものは、この変身願望を職業化している。一日中に幾たり別の別人に生れ変わることであろう。探偵小説の変装というものが、やはり、この変身願望を満足させる役割を果している」と変身

に対する憧れを綴り、変身願望は隠れ裏願望にも通じると説いている。他者になり替わることを常態とするあまり自分の本当の顔を忘れたという二十面相は、本名や素顔をはじめあらゆる個性を放棄した状態であり、他者のアイデンティティを借用することが彼のアイデンティティである。

二十面相の正体が他者の人格に吸収され、元来有していたはずの個性を失っている人物であると考えれば、個性を喪失していれば誰でも二十面相として活動できるといえる。二十面相が身体的特徴や年齢の著しく異なる人物にでも化けられるのは、二十面相として活動している人物は一人ではないからであると考えるのが最も合理的である。第二章で透明怪人事件のからくりを舞台に喩えて解説する明智の言葉を用い、第三章では怪人二十面相とは二十面相という芸名を用い、変装によって他者を演じる俳優的存在であることを論じた。個性を持たない複数の人物が協同して二十面相という芸名を使用し他者を演じているなら、二十面相の本名を一つに特定することは困難であるのも当然であり、嚴重な監視をもつとせず脱獄し再び世間に姿を現すことも容易である。⁽⁵⁾二十面相として活動している人物にとつて、生まれ持った肉体とは他者になりすます際に必要な容器に過ぎず、個人を識別するための本名とは無意味なものではない。

乱歩は前出「透明の恐怖」において、「自分だけが透明になり、目に見えなくなつた、こんな都合のよいことはない。愛欲は思うままである。物を盗んでも、人を殺しても、絶対につかまることがない。自分のからだを見えなくするということは、人類何千年の夢であつた」と述べている。「透明怪人」第七回

(昭和二六年六月)では、「みなさん、自分のからだだが、まったく目に見えなくなったら、どんなきもちがすると、おもいますか。じぶんが、この世から消えてしまうのです。しかし、ちゃんと生きているのです。(中略)一生、目に見えない人間として、くらさなければなりません。世の中に、こんなおそろしいことが、またとあるでしょうか」と、透明怪人を造り出しているという老怪人に捕まった大友君という少年の心中を慮る文言があるが、一生目に見えない人間として暮らさなければならぬ人間とは、二十面相として日々活動している人物にも該当するものである。

二十面相はしばしば犯行前後に名乗りを上げ自己顕示を行っていたが、どんな悪事を働いても発覚の恐れがない代わり、自己顕示を行わなければ永久に他者に認識されず存在を顧みられることがないというジレンマによる行動であろう。

本作のテーマである透明人間について、「このテーマを全面的に押し出した点では『透明怪人』が全小説中随一であり、それは乱歩作品においてはとりわけ重要な意味をもつ。(中略)変装は隠れ蓑としては序の口で、透明人間こそ究極の隠れ蓑にほかならない」(新保博久「よみがえる“隠れ蓑願望”」、平成一六年四月光文社江戸川乱歩全集第一六巻『透明怪人』)と乱歩が強い関心を寄せていたという指摘があり、前掲「炉辺閑話 変身願望」からも関心のほどがうかがえる。アイデンティティを放棄して完全に他者へなりすまし透明な存在になることは変身願望、隠れ蓑願望をはじめ多くの欲求を満たしてくれる一方、自己を承認されない恐怖と苦しみをもたらすことが、完璧な変装で自己顕示を行う二十面相の姿を通じて表されている。

五、おわりに

「透明怪人」で二十面相が透明怪人の噂を流布させたのは、人間の心理的盲点に働きかけて自身を透明にすることが目的であった。透明怪人の噂を隠れ蓑に意図的に人間の認識から抜け落ち、巧妙に自身の姿を人目から隠している同作の二十面相は、透明人間の一種といえることができる。乱歩の作品のうち、アイデンティティも名前も失い他者の人格の一部として行動する人物として大正一五年の中絶作「二人の探偵小説家」における空気男・柴野金十が挙げられる。「二人の探偵小説家」は、同期に連載していた「闇に蠢く」(大正一五年一月〜一月)『苦楽』全九回。昭和二年一〇月平凡社刊現代大衆文学全集第三巻『二銭銅貨』収録分にて結末を補完。)同様に筋を十分考えないまま連載を開始し、空気男というキャラクターについての構想が未成熟であった可能性も否定できない。しかし、柴野金十が友人の北村五郎に記憶力の弱さを指摘されて以降、徐々にアイデンティティが北村のそれへと吸収されてゆき意のままに操られる存在へと変化していく過程が描かれており、アイデンティティを失い他者の人格に支配されて行動しなければならぬ空気男・柴野は、怪人二十面相の原型であると考えられる。大正一五年「二人の探偵小説家」で最初の空気男を描き、昭和三四年『べてん師と空気男』で最後の空気男を描いた乱歩だが、アイデンティティの喪失、記憶力の弱さという柴野金十の欠点を他者のアイデンティティを借用し自在に他者になりすませるといふ長所へ転化させ、空気男の変異種である怪人二十

面相を創造したといえる。頼りなく他人に利用されるだけの空
気男を名探偵でさえ捕縛に苦勞する盜賊へと昇華させ誕生した
怪人二十面相は、ヒーローとしての空気男なのである。

アイデンティティの無さを武器とした怪人二十面相は他人の
アイデンティティを自由に借用し、変装や演技で他人に変身す
る役者として乱歩作品という舞台上で活躍し、世界中に存在す
る名を知られることについての迷信に倣うかのように、本名を
秘匿することで超人的能力を發揮し続けていた。他者の容姿を
借用しながらも自己顕示を繰り返し他者承認を試みる二十面相
とは、他人の名をもじった筆名で活動する一方、スクラップブ
ックや年次を追った回顧録で自分自身についての詳細な記録を
残し、エドガー・アラン・ポーではない江戸川乱歩を顕示し続
けた作者の分身であったといえる。

[注]

(一) 拙著『江戸川乱歩作品論——一人二役の世界』(平成一二年三月
和泉書院)収録の「二人の探偵小説家論」では、「二人の探偵小
説家」の柴野と北村が、彼等の唯一の識別手段であった名前の
交換を開始したのとほぼ時を同じくして二人のアイデンティテ
ィが攪乱され、柴野の人格が北村の人格の支配下に置かれるよ
うになったと解釈できることを述べている。柴野の記憶力の弱
さを裏付ける確かな証拠は、北村ではないことが明らかかな第三
者からは提示されておらず、健忘症の証拠や証言はほとんど北
村が提示していることから、柴野の健忘症とは北村の捏造であ
る可能性を述べている。

(二) 「心理的盲点に入る」とは、自分にとって重要ではないと判断

した情報を無意識のうちに認識外に追いやり、重要であると判
断した情報しか認知していないことである。

(三) この真珠塔について、本文では「高さ二十センチぐらいの五重
の塔で、それに真珠の玉がビッシリとはりつめてあるのです。(中
略)この真珠塔は大正時代の大本博覧会に、三重県の真珠王が出
品したもので、なくなったわたしの父がそれを買いとつたので
す」(「透明怪人」第三回)とある。「御木本真珠塔」(1900年史)
(平成六年七月御木本真珠塔100周年史編纂委員会)によ
り大正一五年フィラデルフィア万国博に「御木本五重の塔」が
出品されていたことが確かめられ、本作の真珠塔とは実在の品
をモデルにしていたことがわかる。同書によれば、「養殖真珠、
天然真珠をふんだんに使い、白金54匁(202g)を使用し、
延べ人員750人、製作期間6ヵ月をかけて作った法隆寺五重
塔の模倣型」であるといい、「御木本真珠塔工場の技術を工芸作品
に応用して製作されたもので、世界に御木本幸吉の存在と『ミ
キモトパール』の名を広めるのに大きな効果があったという。
「灰色の巨人」でも「志摩の女王」という名で同様の真珠塔が
登場している。御木本幸吉は昭和五年に日本の十大発明家にも
選出されており、御木本五重の塔は高価な宝飾品というより、
当時の最先端技術と人間の労苦を結集させた美術・工芸品とし
て注目を集めたものであろう。

(四) 心理的盲点に捉われているために正確な認識が妨げられる例は、
「透明怪人」に先駆けて「青銅の魔人」(昭和二四年一月〜二
月『少年』)でも使用されている。二十面相の化けた青銅の魔人
が逃走経路確保のため私設マンホールをあちこちに設置し追跡
を免れていたことを「人間の注意力のすさまじさ」につけこんでい

たと表現し、「下水のマンホールね。あれはどここの町にもあるが、誰でもその上を歩いていて、さてマンホールがどこにあるかときかれても、ちよつと思いだせないものだ。毎日通っている学校の階段の段のかがいくつあるか、だれも知らないのと同じわけだよ」と心理的盲点の作用を説明している（『青銅の魔人』第一〇回、昭和二四年一〇月『少年』）。

(五) 本文掲『少年探偵団読本』第五章「怪人二十面相の真実」では、襲名により複数の人物が二十面相と名乗って活動していた可能性があり、二十面相は少なくとも四代目まで存在した可能性があるとしている。

(六) この記事は、中川長昌という筆名で執筆されている。

(七) 松平千秋訳（『ホメロス オデュッセイア』(上)、平成六年九月岩波書店）では、オデュッセウスの名乗った偽名は「ウ誰アイもおニスらぬ」である。

(八) タイトル、本文ともに「願望」には「がんもう」とルビがふられている。

(九) 光文社文庫版江戸川乱歩全集『透明怪人』解説では、透明怪人事件の犯人が二十面相であるとすれば同時に二か所に存在

していたとしか考えられない状況があり、二十面相が犯人と考えるには無理があるのではないかという新保博久の見解が示されている。個性を持たない複数人が同時に二十面相を名乗って活動していると考えれば、透明怪人事件の犯人が同時に二か所に存在していたとしか考えられない状況についても合理的説明が可能である。

(十) 「探偵小説三十年」（昭和二六年七月『宝石』）には、「闇に蠢く」は同時期に依頼され執筆していた「二人の探偵小説家」、「湖畔亭事件」（大正一五年一月〜五月『サンデー毎日』）同様、筋がほとんどできていないまま執筆を開始したとある。

〔付記〕

引用文はそれぞれ初出により、通行の字体を用い、適宜ルビを省いた。なお、本研究はJSPS 科研費 25770080 の助成を受けた成果の一部である。

（みやもと わかこ・京都光華女子大学講師）